

JAELE Newsletter

上越英語教育学会通信

The Joetsu Association of English Language Education

December 1, 2015

No. 14

話上手の秘密を探る：研究と実践の観点から

上越教育大学

講師 長谷川佑介

今年、茨城県から新潟県に引っ越してきたばかりで、まだ雪国の冬を経験していない私ですが、早くも本誌への寄稿の機会をいただきました。いったいどんなことを書けばよいのだろう…と悩みながらバックナンバーをぱらぱらと読んでいるうちに、ついつい時間を忘れて読みふけてしまいました。海外の最新事情や素晴らしい体験談、そして英語教育に対する熱い想いから文化的なトピックまで、テーマは様々ですが本誌のトップ記事はどれも読み応えがあります。軽快な語り口というものは、どうしてこうも読み手を惹きつけるのでしょうか。もしかすると、こういう魅力的な語りの技術というのも、良い教師たる条件のひとつなのかもしれません。そこで、本稿では「話の巧さ」について少し考えてみたいと思います。

そもそも、「話の巧さ」とは何なのでしょう。文章の中身が重要なのは言うまでもありませんが、何か書き方のコツはないのでしょうか。色々な研究論文などを読んでみると、どうやら分かりやすくして記憶に残る文章を作るにはいくつかの秘訣があるということが見えてきます。第一に、文章の構成がやはり大事だと言われています。起承転結や序論・本論・結論など、ある種のセオリーに則って書かれた文章は読んでいて気持ちがよいものです。ある研究によれば、文章構成の型（ここでは Story Grammar）に従って書かれた物語文とそうでない物語文を比較すると、たとえ物語自体の内容がやや抽象的であっても、文章構成の型に従って書かれたほうは読み手の記憶に残りやすかったそうです（注1）。第二に、文どうしのつながりの良さというのも大切です。文どうしというよりも、命題どうしと表現したほうが適切かもしれません。本稿の冒頭で述べた、「雪国の冬を経験していない私ですが」と「本誌への寄稿の機会をいただきました」という2つの命題には、さして強い結びつきがあるわけではありません。順接的とも逆接的とも取れますが、いわゆる単純接続のガ（あるいは俗に曖昧接続のガ）と呼ばれる用法だと思います。このように情報間の関連性が曖昧だったり、あるいは複雑だったりすると、その文章を理解するのが困難になってしまうと言われています（注2）。さらに、接続詞が上手に使われていなければ、なおさら理解しづらい文章になってしまいます（注3）。さっそく反省点だらけですが、読み手を惹きつける

文章を書くというのはやはり難しいものです。

それでは、文章を書くことではなく、口頭で話すことについてはどうでしょうか。落語家のような話術の妙というのはとても体得できる気がしませんが、せめて聞き取りやすく、分かりやすい話し方ができるようになりたいものです。分かりやすく話すための方策としてすぐに思いつくのは、例えばゆっくり話してみるとか、あるいは文法的に複雑な表現を使わないように気を付けるとか、そういったことではないでしょうか。しかし、ある研究によれば、単純に話の速度を落としたり、難しい構文を使わないようにしたりするだけでは、聞き手の理解度にはあまり貢献しないとのことです（注4）。もちろん速すぎる話し方や必要以上に複雑な構文はダメでしょうが、それよりも適切どころでポーズを置くことのほうが聞き手の理解を助けるのに効果的だそうです。たしかに、話の巧い人は「間の取り方」が絶妙だという気がします。また、文の中の大切な情報を目立たせるように話すという、いわゆる文強勢も大切です。間の取り方だけでなく抑揚のある話し方をマスターすることでできれば、聞き手にとっても重要な情報とそうでない情報を区別しやすくなりますので、メッセージの伝達が効率的に行えると考えられます。ある研究によれば、リスニングにおいて聞き手の理解度が最も高まるのは、ポーズと強勢（ここでは pitch）の両方が適切に組み合わせられているときだそうです（注5）。間の取り方や文の抑揚をつけた話し方は、もちろん研究テーマとしても興味深いのですが、教師としてぜひ身につけたい技術だと思いますので私も日々練習中です。

考えてみれば、分かりやすく書いたり話したりするといったスキルは、中学生、高校生、大学生に身にもつけさせたい重要な力です。国語はもちろんのこと、英語の力としてもぜひこういうスキルを育てていきたいものです。中学校学習指導要領（外国語）にも、「強勢、イントネーション、区切りなど基本的な英語の音声の特徴をとらえ…」（話すこと）とか、「自分の考えや気持ちなどが読み手に正しく伝わるように、文と文のつながりなどに注意して…」（書くこと）といった記述があります。しかし、大学生に英語を教えていても、英語で分かりやすく書いたり話したりするスキルにはまだまだ伸びしろがあると感ずきます。英文を要約するタスクを学生に与えてみても、最初は接続詞を上手に使うことができません。もちろん、For example, とか However, といった簡単な表現は全員が知っているのですが、ライティングの際にとっさに使えないことが意外と多いようなのです。また、学生の音読を聞いてみても、その音声の中に適切なポージングが感じられることはあまり多くありません。これにはおそらく原因が2つあって、ひとつは自然にポーズを置くことができないということですが、もうひとつは本来つないで発音すべきところをつなぐことができないせいで、ポーズがある箇所とない箇所の差が消えているためだと思われまます。こういった点は、何週か練習してもらっただけでも少しずつ上達していきますので、授業の中でぜひ繰り返し丁寧に指導したいと思っています。もちろん大学教育の目的は生徒や学生を文豪や作家に育て上げることではありませんが、英語の授業の中で、文章構成、命題間の関連性、ポーズの置き方、文強勢の置き方といったエッセンスを少しずつ取り入れていくことで、言語のユーザーとしての技術や気づきを高めていくことができるのではないかと感じています。

さて、本学に着任して、研究成果や理論的な背景を知ることで巡り巡って指導実践に活かすことができるのだと気付くことが色々とあり、本稿ではその一部を取り上げてみたつもりです。今回は自己紹介を兼ねた随筆もどきになってしまいましたが、もし将来また寄稿させていただく機会があれば、そのときには何か巧い話を書けるように努力したいと思っています。これから研究のこ

とも教育のことも頑張って精進して参りますので、最後まで読んでくださった皆様、今後ともどうぞよろしく願いいたします。

(注1) Sadoski, M., Goetz, E. T., & Rodriguez, M. (2000). Engaging texts: Effects of concreteness on comprehensibility, interest, and recall in four text types. *Journal of Educational Psychology*, 92, 85–95.

(注2) Singer, M., Halldorson, M., Lear, J. C., & Andrusiak, P. (1992). Validation of causal bridging inferences in discourse understanding. *Journal of Memory and Language*, 31, 507–524.

(注3) 大村彰道・撫尾知信・樋口一辰. (1980). 文間の接続関係明示が文章記憶に及ぼす影響. 『教育心理学研究』, 28, 174–182.

(注4) Blau, E. K. (1990). The effect of syntax, speed, and pause on listening comprehension. *TESOL Quarterly*, 24, 746–753.

(注5) Ishikawa, K. (1994). Grouping effects on the memory of speech. *Language Laboratory*, 31, 19–29.



獅子柚子：

中国揚子江原産で奈良時代に日本に渡来したと伝えられる。柚子という名前がついているが「ザボン」や「ぶんたん」の仲間でも木の高さは3～4メートルになる。果実も大きく、直径20cm以上、重さ1kg位になる。ジャム、マーマレードの材料として利用される。「鬼柚子」とも呼ばれる。

出会いを通じて

大学院 1 年 言語系コース(英語)

岩崎礼菜

大学院に入学してから、人との出会いの大切さを感じます。当たり前のことですが、大学院に進学していなかったら、今、共に学んでいる仲間と出会うことはありませんでした。この出会いは偶然ではなく、何かのめぐり合わせのように感じます。

大学院進学を考え始めたのは大学 4 年生の夏でした。進学を決めるまでに様々な葛藤がありました。昨年は教員採用試験も受け、1 次試験を合格した自治体もありましたが、結果は全て不合格でした。教員採用試験の勉強をしながらも、心のどこかで「私が教師になっていいのだろうか」という迷いがありました。そのような気持ちで試験に臨んでいた訳ですから、落ちてしまっても当然だと思います。私が抱えていた不安を試験官は見抜いていたのだと思います。

進路を決めなければならない時期になり、私には講師、就職、進学の 3 つの選択肢がありました。講師に登録しようと思えば出来ました。しかし、登録をしませんでした。教壇に立つ自信がなかったからです。就職活動をしようと思えば出来ました。しかし、しませんでした。教師になるということを諦めきれず、どうしても乗り気になれなかったのです。そして、大学院への進学を決めました。もちろん、英語教育についてもっと学びたいという思いはありました。しかし、どこかで、大学院に進学することを社会からの「逃げ」だと思っていました。私の周りに進学する人が少なく、就職をする人がほとんどだったことが、そう感じさせてしまったのかもしれませんが、しかし、大学院に入学して私のそのような考えは浅はかだったと気づかされました。

大学院には、私のように大学を卒業してすぐに入学した人、社会人経験者、現職教員の方々など様々な経歴、背景を持った方が通っています。それぞれが、それぞれの思いを持って大学院で学んでいます。今までにないくらい刺激的な環境です。大学院に進学することを逃げだと思っていたことが恥ずかしいくらい、院生の方々は学ぶことに貪欲です。私もそのような姿に日々刺激を受け、学びの原動力となっています。学ぶことの楽しさを改めて感じる日々です。

今年も大学院在学者の名簿登録猶予制度を使って教員採用試験に挑戦しました。一次試験が通り、二次試験に向け、夏休みにゼミの先生や先輩、同期、現職の方々など、たくさんの方が模擬授業の練習のために何時間も付き合ってくださいました。本当に心強く、ありがたかったです。そうして臨んだ二次試験。結果は不合格でした。ゼミの先生にすぐに報告に行けませんでした。結果を報告することは、お世話になった方への礼儀ですが、申し訳なくて直接報告をできていない人もいます。そのような中、英語コースの同期の院生とお酒を交わす機会がありました。その中で、ある一人の院生が言ってくれた言葉が印象に残っています。

「あえて試験の結果を聞かないけれど、もっと成長できるって思っているよ。あとね、不安な気持ちが顔に表れていることも気づいているよ。それが課題だね。頼れる人がいるのだからもっと人に頼ってもいいんだよ。頼りに来てくれるのを待っているからね」

弱さの核心を突いた言葉でした。少しは克服できていたとは思っていましたが、自分の弱さが

まだまだ顔に表れていたことに気付かされたと同時に、厳しくも温かい言葉に触れ、強くならなければと覚悟を決めたときでもありました。

時々考えることがあります。「大学院に進学していなかったら」と。弱さを指摘してくれる大学院の同士の、成長を見守って、後押ししてくれる方々と出会うことはなかったかもしれません。私は今、恵まれた環境にいます。大学院のこの環境が私を日々成長させてくれています。まだ、教師になる道が断たれたわけではありません。今度、試験を受けるときには不安な顔をせず「私が教師になる」そんな気持ちで臨めるよう、これからも努力を重ねていきます。



福来（ふくれ）みかん：

直径2～3cmと小粒ながら、香りの高さのみかん本来の酸味を味わうことができるみかん。古くから日本に自生していた橘の一種とされており、現在もつくば山麓で栽培されている。温州みかんが一般的になる前、茨城県でみかんといえば福来みかんを指す時代もあったという。地元では七味唐辛子の材料の一つ陳皮（ちんぴ）として用いられている。温州みかんと比べて可食部が小さく種が大きい。糖度の高い蜜柑が追及される中、次第に忘れ去られてきたが、近年、その香りの高さなど、福来みかん特有の良さが改めて注目され、七味唐辛子のほかジャムなどの原料としても、その存在価値が見直されている。

雑感

大学院 1 年 言語系コース(英語)

野口 裕太

大学院での生活も 7 か月を超えた。ここに最近私が思っていることを書く。

大学院での授業は、学部の授業と比べて、より専門的な内容になった。特に、ある論文を材料とし、それについて発表する形式の授業が多い。実際に論文を読み、それを理解することは容易なことではない。しかし、論文を読み進めるうちに、少しずつ著者の主張したいことを理解し、その周辺の知識を得ることができるようになってくる。すると、とても嬉しい気持ちになる。共に学ぶ M1 の仲間たちも、向学心に富み、多様な背景を持った人間が集まった。そのような中に身を投じ、じっくりと学習できることは本当に幸せなことだと思っている。

また、同期の人たちとの交流も私にとっては有意義だ。授業や懇親会などを通して、いろいろな人たちと交流する機会がある。これから教職を目指す人もいれば、研究者を目指す人もいる。それぞれの人たちにはその人なりの英語との関わり方があり、彼らの話を聞くことはとても楽しい。英語の学習法も千差万別であり、最新のインターネット上のサービスを利用した学習のやり方も教えてもらった。

私自身は、学部も本学の卒業であり、その意味では、2 度目の上越教育大学への入学であり、感慨もひとしおだった。しかし、当時と今とでは置かれた立場が違い、一概に比べることはできない。特に、今回の大学院は「派遣」という形で学ぶ機会を頂いたわけであり、その成果を新潟県に還元するという任務も持っている。大学院での生活は誰からもコントロールされないのだから、常に自らを律していかなければならない。この点こそが、大学院での一番の学びなのかもしれないと思っている。というのも、私は元来、面倒くさがりな性格の持ち主なので、気を抜くとつい楽な方向に自分をもっていってしまいがちだからである。そんな自分をきちんとメタ認知し、学習に向かわせるのは、言うは易し行うは難しである。

最後に、私は小学校から大学までこの新潟県で育った。私は新潟県が大好きだ。とても強い愛着を持っている。そして、縁あってこの新潟県で英語教師として働く機会を得た。だから、いずれは新潟県の英語教育が他の都道府県をリードする日が来ることを願っている。私たち新潟の教師が共に手を取り合い、優れた教育実践で大きく生徒たちを伸ばすことができるように、大学院での研修に励もうと心を新たにしている。残り少ない大学院生活であるが、積極的に、貪欲に学び、新潟県を支える力強い教師になれるように頑張ろうと思っている。

充実した大学院生活

大学院2年 言語系コース(英語)

宮澤俊一

私がこの上越教育大学大学院に入学してからもうすぐ2年が経とうとしています。入学した当初は分からないことや知らないことがたくさんあり、とても不安でしたが、先生方や先輩、友人にも恵まれ、楽しく充実した日々を送ることができました。現在私は英語分野の中でも小学校英語について学んでいます。私が所属しているゼミは、小学校英語に関するものです。ゼミでは上越教育大学附属幼稚園に行って、幼児と関わり合いながら英語活動を行ったり、上越教育大学附属小学校に行き、外国語活動を子どもたちに指導したりと実践的な指導が行えます。子どもたちの前に立ち、英語を指導できるという経験はなかなかできないものなので、一回一回の時間を大切にし、英語を指導する力を高めています。できないことや難しいことも多々ありますが、子どもたちが、目を輝かせて英語を楽しそうに学ぶ姿を見るのは、指導する立場としてはとてもやりがいがあるものです。外国語活動の教科化が決まり、今後は小学校で英語を指導することが本格的になってきました。私が今、力を入れて取り組んでいることは小学校で英語を指導するための指導力と知識を身に付けていることです。特に所属しているゼミでは、フォニックス、音韻認識、協同学習、CLIL(内容言語統合型学習)、動機づけなどを論文で取り上げ、外国語活動における指導や主な活動の内容、子どもたちの音による理解の差、興味関心についてどのようにして英語を指導していくのがいいのかをお互いに話し合い、理解を深めています。ゼミを担当する先生、大学院生を始め、学部生も一緒に参加するので、様々な意見や話を聞くことができ、貴重な経験を行うことができます。また話し合う際に自分で討議の議題を決めて話し合いに臨むので、論文を読んで自分の中で理解できなかったことが話し合いを通して分かったり、自分が関心のあることをさらに広げたりすることができます。今後は教科化に向けて外国語活動の研究や議論が益々進むと考えられるので、論文を調べたり、ゼミの中で話し合ったりすることを通して、理解を深めていきたいです。また、私は将来小学校の教員になることを目指し、日々の学習に取り組んできました。入学した当初は、中学校・高校の英語一種免許状しか持っていなかったもので、小学校の免許を取得するため、教育職員免許取得プログラム生として小学校に関する講義を受講してきました。やはり、自分が目指していること達成するために、学んだり、経験したりすることは、とてもやりがいがあります。実際に、児童の学んでいる姿や指導している先生の姿を観察したり、教育実習で自分が目の前にいる児童に指導をしたりする貴重な経験が持てるので、とても充実した学びを得ることができます。来年で大学院での生活が終わりとなりますが、今まで学んだことを無駄にせず、一日一日を大切に、さらなる学びを深め、自分が教師になっときに、活かせる指導力を身に付けていきたいです。

研究室の窓から



清泉女学院短期大学 教授
中村洋一（平成4年度修了生）

連載第2回

最近、旅行に出かけておみやげを買うのが億劫になってしまった。子供たちが小さかった頃は、国内でも、海外でも、旅行先で、「これ、喜ぶかなあ」なんて考えながらおみやげを選ぶのがひとつの楽しみでもあった。それを持って帰ると、子供たちは旅行の話を熱心に聞いて、おみやげにも喜んでいるように見えた。しかし、最近では、あんまり喜んでいないように見える。自分自身の旅行自体が点から点への移動が多くなり、ついつい、行く先々の、いわゆる「おみやげ屋さん」で、人数分のキーホルダーをまとめ買いしたりするようになってしまったのだから、無理もない。

2015年9月、学生引率で台湾の高雄へ出かけた。国立高雄第一科技大学（National Kaohsiung First University of Science and Technology, NKFUST）への語学研修である。今回は、おみやげを買う時間も少なそうなスケジュールだったので、輸入代行業者へ事前に注文しておいた。帰国して、届いていた段ボールを開けてみてびっくりした。パイナップル・クッキーとパイナップル・チョコレートの箱の外側に、“Made in Malaysia”と書いてあったのだ。台湾に行ったのに、Malaysiaじゃあダメじゃん、と思った…。「オマヌケなおみやげで、すみません」と言い訳しながら、職場の関係者に帰国の挨拶をした。

(2) おみやげ、何がいい？

思い出深い、「自分のため」のおみやげはいっぱいある。

はじめて行った海外旅行のグアム島では、スコールで運転できなくなって、レンタカーのコローラ（左ハンドル!）を止めた公園に、椰子の実が落ちているのを見つけて、そおっと持ち帰った。帰国して荷物検査の機械に通したら、スーツケースの中に、くっきりはっきり椰子の実が映っていて、冷や汗をかいた。

高校の教員になった次の年の春、まだその頃の長野県にあった「寒中休業」を利用して、アメリカ本土へ行った。グレイハウンド・バスを乗り継いでサンフランシスコからワシントンまで10日程かかった。途中、テキサス州のエルパソという町で、ギターをのびのびとした真鍮製のペーパー・

ウェイトを買った。砂漠の端っこにある砂埃の町、エルパソのバス・ディーポから隣の席に座った鳶色の瞳と黒髪的女性が、とても美しかったのを鮮明に覚えている。メキシカンもネイティブ・アメリカンも、ジャパニーズと同じモンゴロイドだなあ、と思った。最終目的地だったアパラチア山脈にある山の中の小さな村で、コレクターから Copy of Guarneri のラベルが貼ってあるフィドルを、\$250 で譲ってもらった。\$1 が¥250 ぐらいの時代だった。

2 回目の担任クラスを送り出した後、学年会のメンバーで香港へ行き、ツアー・ガイドの案内を断って出かけた普通のデパートの楽器売り場で、小さなシンバルを買った。このシンバルは、一緒に行った若い同僚の結婚式の余興で活躍した。

新婚旅行で、またアパラチアの山の中に行き、オート・ハープという楽器を買った。その後の人生で、必要以上の数の楽器を購入してしまうことにまだ気が付いていない若奥さんは、困ったような顔をしていた。帰国途中のトランジットで立ち寄ったシアトル、タコマ国際空港では、スモーク・サーモンを山ほど買った。やっぱり若奥さんは、困ったような、あきれたような顔をしていた。

上越教育大学を修了した翌年、当時の文部省が主催していた海外教育使節団通訳の仕事を拝命し、1 ヶ月間で、ドイツ・オーストリア・ポルトガル・フランス・アメリカを回り、各地の農業高校を訪問した。ミュンヘンのオクトーバー・フェスで生ビールを呑むのを楽しみにしていたが、生ぬるいビールはちょっと期待外れだった。かえって、乾燥しているポルトガルで呑んだ、キンキンに冷えたオランダ製のビールが、期待以上においしかった。

オーストリアには、忘れられない「おみやげ」がある。ザルツ・カンマーグートのモント湖に出かけ、映画『サウンド・オブ・ミュージック』で、トラップ大佐とマリアの結婚式の場面が撮影された教会を訪ねた。そこにあった売店に、エーデルワイスの押し花が一輪、小さな額に入っている壁掛けがあり、添乗員さんがしきりに勧めてくれた。ちょっと興味もあつたけれど、額が小学生の工作のようなレベルに見えて、結局は買わなかった。しかし、この小さな壁掛けが、なんだかわからないけれど、思い出の中に頻繁に出てくる。トラップ大佐が映画の中で「エーデルワイス」を唄ってから、今年で50年だそうだ。この壁掛けをおみやげに買ってきていたら、トラップ家と同じ人数になった我が家の子ども達に、自慢話のひとつもできたのに、とちょっと悔しい。

カリフォルニア、ハワイへと続いて出かけた学生引率の出張では、経済のグローバル化を、身を持って体感した。アーバインのスーパーで Made in USA を見つけるのは、そう簡単なことではなかった。ほとんど輸入物の隣にやっと見つけたアメリカ製の石鹼を買って、お世話になっていた University of California, Irvine のスタッフに見せたら、“Unbelievable!” とびっくりしていた。ホノルルのスーパーには、信州味噌のパックも、飯山みゆき農協のエノキ茸も置いてあった。そういえば、新しい親戚に挨拶しに南アフリカに行った時には、ヨハネスブルクのスーパーに、醤油や寿司酢が置いてあったし、「いいちこ」まであった。

ハワイからはウクレレを買ってきて、もう事情が分かっている、若くはなくなった奥さんに「まったく、もおお、またあ?」と言われた。カリフォルニアからは UCI のウィンドブレーカー、南アフリカからはマンデラ元大統領の写真と同じスプリング・ボックスのラグビー・ジャージを買ってきたけれど、両方とも Made in China だった。

台湾では、子供用にといい、臭豆腐の屋台の隣で売っていた貝殻のキーホルダーを買った。そ

れから、墾丁(ケンティン)のホテルにサービスでついていたビーチサンダルを持って帰ってきた。

さて、教育の話題である。2015年6月8日、文部科学大臣より、「国立大学法人等の組織及び業務全般の見直しについて」という通知が出された(http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/062/gijiroku/_icsFiles/afielldfile/2015/06/16/1358924_3_1.pdf, 2015年11月取得)。その通知の別添1・別紙1は「国立大学法人の第2期中期目標期間終了時における組織及び業務全般の見直しについて」という文書で、その第3、国立大学法人の組織及び業務全般の見直し、1 組織の見直し、(1)「ミッションの再定義」を踏まえた組織の見直しの項で、以下のように通知している(p. 3)。

「ミッションの再定義」で明らかにされた各大学の強み・特色・社会的役割を踏まえた速やかな組織改革に努めることとする。

特に教員養成系学部・大学院、人文社会科学系学部・大学院について、18歳人口の減少や人材需要、教育研究水準の確保、国立大学としての役割等を踏まえた組織見直し計画を策定し、組織の廃止や社会的要請の高い分野への転換に積極的に取り組むよう努めることとする。

この通知に対して、以下のような大学側からの動きが報道されている(産経ニュース <http://www.sankei.com/life/news/151027/lif1510270001-n1.html>, 2015年11月取得)。

文系軽視は「国揺るがす」 国立大17人学部長が文科省に抗議文

文部科学省が今年6月の通知で国立大の人文社会科学系学部などの廃止や組織見直しを求めた問題をめぐり、信州大など国立大17校の人文系学部長会議は26日、「人文社会科学の軽視は国の人的基盤を根底から揺るがしかねない」などと通知に抗議する共同声明文を文科省に提出した。

声明文では、今回の通知について「大きな疑問を抱かざるを得ない」と批判。それぞれの大学の特性に応じて柔軟な対応を求めた。

声明文を提出した信州大人文学部の吉田正明学部長は「文科省は通知で誤解を招いたと陳謝したが、受験生や高校の進路指導の教員にも真意が伝わるよう配慮してほしい」と話した。

「通知」の文言、特に第2段落の表現については、自分自身も、少なからず違和感を覚えている。「人材需要」って何だろう?そもそも「人材」という語からは、国際的経済競争とか経済効率とかのイメージがちらつき、やや片手落ちの教育観の象徴ではないか、と思ったりする。それから、一方で声高に謳われているグローバル人材の育成と、人文社会科学系の組織の廃止や転換は同一の方向を向いている話なのだろうか? Global Citizenの育成には、バランスの取れた教育が不可欠ではないのか? 「社会的要請の高い分野」って何だろう? たしかに、社会的要請に応えることは、教育の責任のひとつではあるだろう。しかし、今、社会は何を要請しているのだろうか? それから、社会からの要請を一方向的に捉えるだけで充分なのだろうか? 教育の側面から社会へ

向かって、将来的な方向性を提案することも教育の責任ではないだろうか?

今、我が家の子供たちに「おみやげ、何がいい?」と尋ねたら、なんて言うだろうか。「おみやげは、笑顔でいいの、お父さん」とは、決して言わないだろう。「キーホルダーは、もういらないよ、お父さん」とは言うかも知れない。しかし、子供たちよ!誰も貰い手のいなかった、銀のベルがついた Key-Ring Charm は、New York リバティ島の売店にあった、数少ない Made in USA で、“Made exclusively for the Statue of Liberty Museum Store.” なんだよ。“The good luck charm that rings true.” なのだよ。それから、階段の隅っこに放っておかれていた、白い貝殻の、マーライオンのような形をしたやつも、台湾のことをもっと知ってもらいたくて買ってきたのだよ。もう日本では唄われなくなってしまった『揚げば尊し』を、夏に行われる卒業式で『青青大樹』という歌詞にして、唄っているんだよ、台湾では。日本が忘れてしまったものを、台湾はずうっと持ち続けているのだよ (https://www.youtube.com/watch?v=5XBmb5XP_vI を是非ご覧下さい)。えっ?マーライオンって、シンガポールだけ? 起源はマレーシア…!



次の世代に、今の教育の「おみやげ」として、何を手渡していくか、教育に携わる者のひとりとして、慎重に考えないといけないと思う。ありまえのことではあるが、今後の教育の方向性を決めて行くには、教育に要請されているもの、教育が要請したいものをしっかりと検討し、何が本当に大事なことなのか、多くの知見を集めて、追求し続けていくことが必要である。

編集後記

本号の巻頭は着任したばかりの長谷川先生にお願いしましたが、快くお引き受けいただき真っ先に原稿をお送りいただきました。バックナンバーに目を通してくださり、言語教育に関連付けた原稿をお送りくださりましたこと編集者として御礼申し上げます。さて、連載第2回目、中村先生の記事の中で言及されている文科省による教員養成系、人文社会科学系学部・大学院の廃止、見直し方針ですが、どのように言い繕っても産業界が求める「役に立つ」人材養成を優先しようという発想であることは明らかに思えます。我が家の庭には甘く誰の口にも合う温州みかんや人目を引く大きな獅子柚子等の数種類の柑橘類がありますが、本号に写真を載せた糖度が低く一般受けしない「福来みかん」も片隅に実っています。小粒で地味ではあるけれど素朴な酸味を持つこの蜜柑。教育政策に関わる人々にこの味をわかってほしいと思いつつ本号の編集を終えました。

(編集委員 H.I.)

2015年12月1日発行

発行者 上越英語教育学会

ニューズレター編集委員会

北條礼子 (上越教育大学)

野地美幸 (上越教育大学)

飯島博之 (埼玉県立大学)
